

# 郷土博物館・文学館だより

## 第13回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

13回目を迎えた平成24年度は、59名から225首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月15日には当館で表彰式が行われました。表彰者の中には、当館主催の文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んで挑戦した結果、

受賞に至った方もいらっしゃいました。

平成25年度も10月から短歌の実作を中心とした講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第14回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十三回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

〔優秀作〕

「参宮橋」柱の残る渋谷川

暗渠の街は人みな若し (飯沼三和子)

「午後四時に八チ公前」と指示を受け

修学旅行の生徒散りゆく (大熊順三)

冬空にヒマラヤ杉は凜と立つ

保存樹林の矜持を持ちて (上山 公子)

笹塚へ嫁して六十余年夢絵巻

精密機器の生業つぎて (久保田吉江)

新詩社が渋谷の町にありし頃

白秋晶子も歩きし道か (本田 道子)

〔佳作〕

顔見れば言い出せぬまま今日も過ぐ

解雇の話中に浮きたり (秋元モト子)

小春日の八チ公前で待つ妻を

見つけてほんのり音がよぎる (糸井 修三)

ハチ公の故郷より来し秋田犬

ゆったりと伏して区民祭みており (岡崎 秀子)

時来れば鴨らは北を指せども

五川上水離れぬカルガモ (木原 昭子)

下校時の吸江寺にランドセル

二人並んで手をあわせてる (後藤 和子)

## 東急文化会館 — 娯楽の殿堂 —

平成 24 年（2012）4 月 26 日、渋谷駅東口に「渋谷ヒカリエ」がオープンしました。平成 25 年 3 月には東急東横線が東京メトロ副都心線と直通運転を開始し、渋谷駅の再開発も本格化しています。

戦前は、「渋谷ヒカリエ」が建設された場所に東京市渋谷国民学校（小学校）がありました。昭和 18 年（1933）の学校移転に伴い、東京急行電鉄株式会社はその土地を譲り受け、本社事務所の分室として使用していましたが、戦災により焼失してしまいました。

戦後、焼け跡には「渋谷第一マーケット」と呼ばれる 70 軒程のバラック店舗が建ち並び、渋谷の戦後復興の足がかりとなりました。

昭和 30 年、当時東京急行電鉄株式会社会長であった五島慶太の命を受け、この地に建設費 20 億円をかけて「東急文化会館」の建設が始まり、翌年 12 月 1 日に開館しました。

「東急文化会館」のキャッチコピーは、「娯楽の殿堂」で、その言葉通り、施設には娯楽と文化を意識した魅力に溢れる店舗構成が考えられました。ダンスホール・ホテル・水族館など 130 にも及ぶプランが提案されたといえます。

工事着工後も大きな計画変更がありました。昭和 30 年 9 月 6 日、東京プラネタリウム設立促進懇話会から五島会長の元に嘆願書が届けられ、最上階に急遽プラネタリウムが建設されることになったのです。

しかし、プラネタリウムのドームが建設されると、建物の高さ 31m という建築基準法で定められた基準を 12m も超えてしまいます。

そこで、東京都の建築審査会にプラネタリウムの文化的意義を説明した結果、例外的に建築が認可され、「東急文化会館」の開館から遅れること 4 ヶ月後の昭和 32 年 4 月 1 日、プラネタリウムは無事オープンしました。

「東急文化会館」では、開館以来各種のイベントが行われ、様々な話題を振り撒きました。

特に、開館直後は、地下 1 階の「東急ジャーナル」（後の渋谷東急 3）が、当時の映画入場料の 20 分の 1 という低価格（10 円）でニュース映画を流して大きな話題となり、入場者の行列ができたといえます。

昭和 40 年代後半には、屋上にゴルフ練習場を開業させ、都心におけるサラリーマンのリフレッシュ空間として話題を集めました。

しかし、娯楽の多様化や施設の老朽化などにより、半世紀近く渋谷の街の文化発信基地であった「東急文化会館」は、平成 15 年 6 月 30 日に惜しまれながら閉館となりました。



東急文化会館

## 宮脇俊三と渋谷駅

『最長片道切符の旅』などを著し、鉄道紀行を文学の一ジャンルにまで高めた宮脇俊三は、渋谷にゆかりのある作家の一人です。

大正 15 年（1926）に埼玉県川越市で生まれた宮脇は、2歳のときに当時の東京府豊多摩郡渋谷町、現在の渋谷区神宮前五丁目に移り住みます。当時の家は梨本宮邸の裏門や市電の青山車庫に接する場所にありました。

同世代の渋谷育ちの文学者に、恵比寿に住んでいた奥野健男がいますが、実は宮脇と奥野は、青山師範学校附属小学校の同じクラスの同級生でした。小学校から東横線の青山師範駅（現在の学芸大学駅）までの帰り道、二人は東海道線の駅の名前を順に言い合うなどの遊びをしていました。昭和 10 年（1935）に宮脇家は世田谷区の下北沢に転居しますが、彼は渋谷駅を経由して通学していたため、当時の渋谷駅周辺は遊び場でもありました。

昭和 26 年に東京大学文学部西洋史学科を卒業した宮脇は、中央公論社に入社します。ここで編集者として活躍し、北杜夫などを世に送り出しています。そして、53年に会社を退職するとともに、『時刻表2万キロ』を発表し、同年に第5回日本ノンフィクション賞を受賞します。以後、作家として活躍し、56年には『時刻表昭和史』で交通図書賞、60年に『殺意の風景』で泉鏡花文学賞を受賞します。そして、亡くなる4年前の平成 11 年（1999）には菊池寛賞を受賞しています。

宮脇は「通勤電車からシベリア鉄道や中米の高山鉄道まで、鉄道のお定まりの運行の中にみすみすしい瞬間を発見するユニークな紀行作家」（奥野健男）で、渋谷駅周辺に関わる思い出についてもいくつか書き残しています。それらの作品をまとめ、さらに小学校時代からの親友である奥野健男・田村明との三人の鼎談を加えた『昭和八年渋谷驛』を平成7年に刊行しています。そこには、「渋谷びいきで、「渋谷駅はゴチャゴチャしていて乗り換えに不便ですな」などと言われると、おもしろくない。（中略）そして、私の東京観は渋谷駅で培われたような気がしている。「雑然の便利さと住みやすさ」を肯定したいのである。」（「私の東京論」）など、幼いころから慣れ親しんだ渋谷に、終生愛着を持ち続けていたことがうかがえます。

宮脇は平成 15 年2月 26 日に 76 歳で亡くなります。戒名は「鉄道院周遊俊妙居士」。鉄道とともに渋谷の地を愛した作家でした。



昭和9年頃の渋谷駅前

## 文化財紹介

区指定有形文化財（内部公開は事前相談）

### 「清岸寺本堂」

一棟（明治時代）

（平成24年度 新指定）所在地 清岸寺



現存する建物は、単層切妻造（たんそうきりづま）の瓦葺（かわらぶき）で、南側に面して建てられています。本堂は、仏間のある西側の六室が中心に構成され、東側三室の附属部とからなっています。各部屋の境界には大きな差鴨居（さしがもい）が設けられ、襖あるいは障子で仕切られています。建物の全体には、一間幅の広縁（ひ

ろえん）が廻り、南側の中央には、二、五間幅の附属部分、その前方には四間幅の玄関が付きます。もともとの建物部材の痕跡から、住宅を仏堂に移築・改造したときに、仏間を立派にするために、柱がスギから太いケヤキに交換されたことが、内陣両脇の板戸の召合（めしあい）からわかります。移築後は、昭和四五年頃に瓦の葺き替えが行われたほか、現在にかけて順次、主体部と附属部との境界の修造、附属部の客用玄関の拡張、北側および東側への規模の拡張および仏壇の北側への拡張、脇陣天井の修造などが行われました。清岸寺本堂は、住宅を仏堂に転用した事例として、かつ明治期における高級な住宅の姿を知ることの出来る事例として貴重な建造物といえます。

#### 【今後の展示予定】

##### ◆企画展「回顧・渋谷駅

—渋谷駅とその周辺を写真で振り返る—

平成25年8月3日（日）～9月23日（月・祝）

##### ◆企画展「渋谷区登録・指定文化財写真展」（仮）

平成25年10月1日（火）～10月14日（月・祝）

##### ◆特別展「ハチ公展」

平成25年10月22日（火）

～平成26年1月13日（月・祝）

#### 白根記念

### 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00から変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

小児:10名以上の団体料金  
小6歳以上の外国人観光客の方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3186-2791

郷土博物館・文学館だより vol.23  
平成25年8月1日発行